

学報

スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI

40

2015.Spring



輪を広げよう

巻頭 学長エッセイ「2020年東京オリンピック・パラリンピックをオールジャパンで迎えよう ―日体大の取り組み―」――1

平成27年度事業計画の基本方針について ―2

特集 ■ 輪を広げよう ―進むスポーツ界・教育機関・地域との連携― 3

競技力のさらなる向上と選手育成のために ―3

スポーツを世界と日本の人々のために ―5

みなさんを支えます―学生サポート窓口紹介― 7

活躍するOB INTERVIEW ―9

「体育科学をリードする」～大学院・研究科の取り組み～ ―11

クラブ情報 ● 平成26年度 全日本学生選手権以上の大会で優勝を収めた大会成績一覧 ―13

NEWS ● 2014年度下半期ニュース ―14

INFORMATION ● dot.NITTAIDAI ―15



輪を広げよう



新しい学年が始まった。

特に、新入生の皆さんは、これまで以上にさまざまな経験をする事だろう。

日本各地から集まるアスリートや仲間たち、

スポーツや教育や保健医療の現場で輝かしい経歴を持つ先生方との

刺激的な出会いが待っている。

狭い世界に閉じこもることなく、積極的に他者と交わり、

挑戦や成長を続けてほしい。

日体大は2016年に創立125周年を迎える。

次代に向け、学校法人日本体育大学のワンファミリー化を推進するとともに、外部の機関や地域との連携を進め、いっそうの社会貢献を果たしていく。

本学の強みをさらに確固なものにすることはもちろんだが、少子高齢化、国際化等の問題が山積する現代では、

志を同じくする者が手を携え知恵を出し合うことが重要だ。

学生たちは日体大の一員であり、日体大は日本の一員である。

心ひとつに輪を広げていこう。

5年後、世界をつなぐ5つの輪を成功に導くために。



学長エッセイ



日本体育大学

学長 谷釜了正

2020年東京オリンピック・パラリンピックを
オールジャパンで迎えよう。

——日体大の取り組み——

東京オリンピック・パラリンピックの開催決定を祝うポスターに「2020年を、未来が記憶する素晴らしい年にしよう。」と記されています。オリンピック・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長（元内閣総理大臣、本学名誉博士）は、この競技祭典をオールジャパン体制で迎えることを宣言、会場を東京以外の地域でも実施することを決定しています。本学の設置者である学校法人日本体育大学は地方の自治体とスポーツに関する包括的連携協定を締結し、全国各地での祭典を迎える機運を醸す事業に取り組んでいます。本学はこの取り組みに対して積極的に支援します。それと同時に、国際社会に向かってオリンピックスポーツに関する文化的・社会的・科学的な情報も発信します。その手始めに本年2月に国による「スポーツ・アカデミー形成支援事業」の一環として「スーパーコーチアカデミー」を開設して6ヶ国からの参加を得て英語による授業を通してコーチの育成事業を開始しています。



平成27(2015)年度事業計画の基本方針について

—日本体育大学—

少子高齢化が進行するわが国では18歳人口の減少傾向に歯止めがかからない状況下
にあり、2018年からはさらにその傾向が進展して高等教育への進学者が減少する
ことから、各大学は国立、私立を問わず、多様な入試改革を行うための方策を講じて
学生確保に努めつつある。これに加えて体育及びスポーツの分野では、有名私立大学
をはじめとした諸大学で関連分野の学部及び学科の新増設が全国的規模で相次ぎ、こ
の分野の専門大学として最も長い歴史と伝統を有する本学においても学生確保の問題
は看過できない状況にある。2020年に東京オリンピックとパラリンピックが開催
されるので、この分野は開業までの間、追い風を受け得ることになるが、2020年後
の社会的ニーズの対応を見れば強い向かい風を受けることになる。したがって全国的
に指導者を輩出してきた本学もこのような状況を危機感として受け止めなければならない。
優秀な学生を全国から確保するための入試の在り方と改善を引き続き図るとともに、
新たに体育学部を改組して国際社会で活躍できる人材の育成と、高齢者や障害者にス
ポーツが提供できる人材の育成を目指して新たな受験生の発掘をはかる必要がある。
また、2013年4月開設の児童スポーツ教育学部、2014年4月開設の保健医療
学部においても優秀な学生を確保するための入試の在り方と改善を引き続き図ること
も喫緊の課題となっている。

いっぽう、本学は2016年に創立125周年を迎える。この節目の年に合わせて短
期的、中期的に事業計画を策定し、これを推進していかなければならぬ。

そこで、このような本学を取り巻く社会環境の変化に対応して本学が将来にわた
って持続的に発展を遂げるために、建学の精神を体現しつつ、理事会が推奨する基本方針
（選手強化「ワンファミリー化」）を踏まえて、効果的な事業計画の具体的な
基本方針を以下において策定するものである。

1 適切な学生数の確保

- ①入試方法の多様化を図り、安定した学生の数とアドミッションポリシーに合うより
優秀な学生を確保する。
- ②全国的な規模での学生の確保
- ③運動能力はもとより、学力の高い学生の確保
- ④首都圏以外の地域からの受験者増加推進施策の検討
- ⑤海外在留邦人及び外国人の受験拡大
- ⑥地域ブロックAO入試における地方入試会場実施の検討
- ⑦平成29年度入試試験からの東京・世田谷キャンパス試験会場帰属を実施するた
めの計画を推進する。
- ⑧編入学受け入れの充実を図る。
- ⑨転・退学生の防止を図る。
- ⑩現状の分析に基づく防止策の検討と策定

2 教学改革の推進

- ①「学力」と「就業力」の向上を意図した2013年カリキュラム（平成25年度体育
学部新入生から適用の円滑な運用を図る。
- ②就職率向上を図る。
- ③企業志望者の向上
- ④教員志望者のレベルアップのための各種スキルアップ講座を実施
- ⑤児童スポーツ教育学部向け小学校教員対策プログラムを実施
- ⑥保健医療学部向け国家試験対策を早期から実施
- ⑦日体力育育成プログラムの構築
- ⑧TA制度の活用
- ⑨日体力育育成プログラムの活用
- ⑩英会話力を向上させる。
- ⑪FD及びSSDに積極的に取り組むなど教育内容及び教育環境の充実を図る。
- ⑫新学習システムを活用し授業評価結果の検証を実施
- ⑬教員の資質向上のために、大学の内外の研修会に職員を参加させるなど、SDの
一層の充実を推進
- ⑭教員の資質向上のための具体的活動として、授業の公開制度や授業の参観制度
を創設する。
- ⑮教員の海外研修を推進する。
- ⑯学生サポーター環境の充実を図る。
- ⑰学生の学修時間や行動を組織的に把握するためのツールとして、GAKUEN
EduTrackを導入する。
- ⑱窓口対応の学生行動ファイル登録システムの構築を行う。データ収集したも
のをQ&Aに反映し分析・対応に活用する。
- ⑲学生カウンセラーの人選確保を引き続き行う。
- ⑳図書館教育の充実を図る。
- ㉑図書館オリエンテーションを進展させ、アカデミックライティングの講座を開講
する。

- ②学術情報基盤整備（電子図書館化）を推進する。
- ③学生生活指導の充実を図る。
- ④日常生活における社会的マナーの向上と禁止薬物（脱法ハーブ等）に対する啓蒙
活動
- ⑤教員養成に向けて、新たな体制を作る。
- ⑥教職支援センターを立ち上げる。
- ⑦学生の学習・生活のより一層の支援と環境の整備を図る。
- ⑧学生食堂を中心とした食育を推進する。
- ⑨健康相談センター及び健康管理体制・健康診断・健康診断事後措置・健康及び
保健相談等）の更なる充実
- ⑩女性アスリートや女子学生が相談しやすい婦人科・総合内科を専門とする女性
の健康相談医による、女性の健康サポート強化
- ⑪AEDの講習を充実させる。
- ⑫スポーツクリニックの開設・活用
- ⑬自動証明発行機システムの再構築を行う。
- ⑭児童スポーツ教育学部の円滑な運営を図る。
- ⑮保健医療学部の円滑な運営を図る。
- ⑯自己点検・評価を実施する。
- ⑰校友会を組織し、積極的な活動を推進する。
- ⑱特別支援学校教諭免許取得について検討する。

3 研究体制の強化・教育・研究活動の一層の推進を図る。

- ①研究体制の再編成と機能強化の推進
- ②学際研究の推進
- ③授業担当コマの平等化・専任教員による教育の充実
- ④研究施設・設備の二元管理を推進する。（管理運営の円滑化）
- ⑤効果的な研究活動を推進するために、円滑な管理・運営を実施
- ⑥研究組織の連携を強化する。
- ⑦総合スポーツ科学研究センターを軸に研究組織（大学院 体育研究所、スポー
ツトレーニングセンター）の連携を強化
- ⑧オリンピック・パラリンピック文化研究所の設置
- ⑨研究活動を推進する。
- ⑩科学研究費助成事業（科研費）応募に際し、大規模予算の獲得に向けた研究プロ
ジェクトの立ち上げ
- ⑪研究助成に基づく研究の公表を義務付け
- ⑫研究施設・設備・備品の一元管理体制の構築
- ⑬外部資金獲得に向けた体制強化
- ⑭学術研究補助費の運用方法の改善を図る。
- ⑮出版物の質向上を図る。
- ⑯論文投稿を促し、質の向上を推進
- ⑰体育研究所及びスポーツ・トレーニングセンターで発行していたジャーナルに関
し、発行内容、形態を変更
- ⑱大学院の教育・研究において、特に研究論文の質の向上に向けて必要支援体制を整
える。
- ⑲論文発表の機会を増やすため、学内学会等の立ち上げについて検討する。
- ⑳論文作成にかかわるチェック体制を整えるためのソフトを導入する。
- ㉑大学院の充実を図る。
- ㉒スーパーチャーターアカデミー
- ㉓大学院事務室の設置
- ㉔スポーツ・トレーニング専攻を開設
- ㉕学生の情報教育のためにキャンパス全体の博物館化を推進する。
- ㉖博物館資料の収集と展示の推進
- ㉗資料の整理と保管のための環境の整備

4 国際交流の推進

- ①国際交流の推進を図る。
- ②JICAと連携して卒業生を青年海外協力隊員として開発途上国に派遣する
- ③トリアスアスリート・オリンピック候補選手等、青年海外協力隊員への希望者
オリエンテーション希望者、海外留学生のための語学教育（主として英会話）
教室）設置
- ④本学独自のスポーツ交流を推進する。（開発途上国へ学生及び卒業生を派遣す
る。）
- ⑤海外大学との国際交流協定締結校を増やす

- ①理事会との連携の下で、大学の政策として重点種目及び強化選手に関する基本方
針を策定する。
- ②奨学生制度の効果的な運用を図る。
- ③スポーツ局の運用の改善を図る。
- ④指導者（専門職のコーチ、トレーナー）の適切な配置
- ⑤強化費の配分
- ⑥運営組織の改善
- ⑦2020年の東京オリンピック・パラリンピックに積極的に協力する。
- ⑧本学出身のオリンピックを70人以上出場させる。
- ⑨上記選手のマチサポーターを編成する。
- ⑩パラリンピックの指導者を養成する。
- ⑪競技力向上のための科学的な研究を推進する。
- ⑫平成26年度に拡大した人的支援体制を整理する。他の附属機関、保健医療学部
との連携により機能する強化体制の確立を目指す。
- ⑬マルチサポーター体制を構築する。
- ⑭2020年東京オリンピックに向けたサポーター体制の構築
（「日本アスリートサポートシステムNASS」）

5 スポーツ競技力の強化（スポーツ競技力の向上（選手強化）を図る。）

- ①公開講座を積極的に開催する。
- ②本学独自の総合型地域スポーツクラブの開設に向けて検討する。
- ③スポーツ教室を開講し地域との連携を検討
- ④全国のスポーツクラブとの連携を強化
- ⑤学生のスポーツ指導者の派遣依頼に積極的に対応する。
- ⑥教育改革を行い、人間力を備えた人材育成につなげる。
- ⑦社会貢献活動をより一層充実し、地域再生・活性化の拠点となることを目指
す。

6 計画的な施設整備

- ①再開発により完成した建物の維持管理を迅速かつ的確に実施する。
 - ②建物の維持管理に関する経費削減（省エネ・エコ対策を含む）を推進する。
 - ③経年劣化に伴う設備の修繕等管理を適切に進める
 - ④屋内・屋外の運動施設の修繕を図る。
 - ⑤既存施設の整備
- ①ホームページの充実と有効活用を図る。
 - ②大学案内「NITT AIDAI」およびサブパンフレットを充実させる。
 - ③学生募集に関する広報活動を推進する。
 - ④メディアを活用した広報活動の促進とマスコミ対応に努める。
 - ⑤学内広報活動をし、情報の共有化を徹底する。
 - ⑥本学学生の就職支援に関する広報活動を側面的に支援する。
 - ⑦受験生、保護者、同窓生等に対して、積極的な情報発信に努める。
 - ⑧児童スポーツ教育学部・保健医療学部の情報発信する。
 - ⑨学生募集広報マーケティングに繋げる施策を展開する。
 - ⑩ブランドアップの普及促進
 - ⑪創立125周年に向けて積極的な広報活動を展開する。
- ①平成26年度に引き続き、経費節約に努め、積立金を確保していく。
 - ②消費税増徴に伴い、学納金の値上げを検討する。
 - ③大学資産の有効活用を推進する。
- ①併設校との施設共有を促進する。
 - ②併設校へ教職員・学生を派遣する。
 - ③併設校の学生の受け入れを促進するための方策を講ずる。
- ①FD・SSDの取組を充実させる。
 - ②事務職員の適性数の確保
- ①125周年記念事業の一環として、学校法人と協力し、積極的に寄付金募集を行
う。

競技力のさらなる向上と 選手育成のために

2020年東京オリンピック・パラリンピック招致のプレゼンテーションにおいて「スポーツ・フォー・トゥモロー」の構想が示されました。スポーツによる国際交流、国際貢献、スポーツの健全な発展のために、わが国がリーダーシップを発揮していこうというものです。国やJOC、大学や各種スポーツ団体、NPOやNGOなどが連携し、構想実現に向けた事業や活動を展開しており、本学はその中核的役割を担うことが期待されています。さらなる競技力向上やスポーツ振興のために、アスリートや指導者、専門家たちが集結しようとしています。本学に関わる最近の動きを紹介しましょう。

Topics①

日本体育大学と日本スポーツ振興センターが包括連携協定を締結

平成27年2月、国立スポーツ科学センターにて、本学と日本スポーツ振興センター（JSC：JAPAN SPORT COUNCIL）が包括連携協定を締結しました。相互の人的・知的資源の交流と物的資源の活用を図り、相互に連携及び協力することで、わが国のスポーツ振興及びスポーツ医科学等の発展による社会貢献を果たすことを目的とするものです。

協定締結式には、日本スポーツ振興センター河野一郎理事長、日本体育大学谷釜了正学長をはじめとする両法人関係者、本学と国立スポーツ科学センターの両方で練習を積みロンドンオリンピック出場を果たした田中理恵助教が出席。わが国の国際競技力向上、スポーツを通じた国際交流、地域貢献にいくことを確認するとともに、谷釜学長は本学から2020年東京オリンピック・パラリンピックに数多くの人材を輩出することを力強く約束しました。



●日本体育大学 田中 理恵助教 コメント

JISSやナショナルトレセンの練習環境や医科学サポート体制は日本最高峰であり、その体制が日体大でも同様に実現されることは、まさに理想的であると言えます。アスリートファーストの観点から、日本代表選手の練習環境の変化による負担を軽減することはコンディショニングやメンタルにおいて重要であり、成績に直結することです。今回の連携協定により、日体大を皮切りに、日本スポーツ界全体のモデルケースとなることを期待しています。私自身今年4月に発足する「日体大アスリートサポートシステム」のアドバイザーとして、日体大から日本代表としてスムーズに活躍できるようサポートを行います。この体制が機能を十分果たし、世界で活躍できる選手を送り出していきたいと思います。

スポーツ最前線①

日本スポーツ振興センター（JSC）

わが国における「スポーツの振興」と「児童生徒等の健康の保持増進」を図るための中核的専門機関。国際的、全国的な各種大会等に対して、国立代々木競技場、秩父宮ラグビー場、味の素フィールド西が丘等、高水準な施設・設備を備えた競技施設を提供。JSCに属する国立スポーツ科学センター（JISS）とナショナルトレーニングセンターは、わが国の国際競技力向上において主導的役割を果たしている。

NSSU Coach Developer Academy International Symposiumを開催

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けた「スポーツ・フォー・トゥモロー」プログラムの一環として、日本体育大学に「NSSU Coach Developer Academy (日本語名：日本体育大学スーパーコーチャー・アカデミー、略称：NCDA)」が設置されました。これは、国際的に活躍できるコーチ育成者の養成とコーチ育成者の国際的なネットワーク構築の中核拠点になることを目指すものです。設置にあたり、平成27年2月、東京・世田谷キャンパス記念講堂にて、「コーチ育成者とスポーツの未来」をテーマにシンポジウムが開催されました。

第一部「様々なコンテキストのコーチングの理解」では、ウェイド・ギルバード カリフォルニア州立大学教授に「Youth Sports」、ゴードン・ブルーム マギル大学准教授に「Paralympic Sports」、クリフ・マレット ケイーンズランド大学准教授に「High Performance Sports」について講演いただきました。

第二部「ポジティブなコーチング文化の創造」では、国際コーチングエクセレンス評議会会長ジョン・ベールズ氏、文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課オリンピック・パラリンピック室長である浅野敦行氏をはじめ、谷釜了正学長、コーチ学研究室伊藤雅充准教授の4名が講演を行いました。

本シンポジウムには、36の団体・大学、3つの中学・高等学校、17の企業から200名を超える参加があり、関心の高さがうかがえました。NCDA では、今後もInternational Symposium等の国内外に向けた取り組みを展開していきます。

さらに、国際コーチングエクセレンス評議会 (英名：International Council for Coaching Excellence、略称：ICCE) からコーチ育成者養成マスタートレーナーや、国際的に活躍する優れたコーチング研究者などを講師として招聘。アカデミー受講生には、コーチ養成に従事する人材を国内・海外から募集し、対面式とオンラインでの学習を組み合わせたブレンド型学習を導入した質の高いコーチ育成者養成プログラムを提供します。オンキャンパスプログラムでは、受講生が持つコーチ育成の経験や課題に関する発表と意見交換をしながら、コーチ育成者として必要なスキル (ファシリテーションやアセスメントなど) を実践と理論の両方で学習。さらに、オリンピズムやスポーツコーチングの今日的課題などについて、世界的に活躍する研究者たちとの議論を通して能動的に学ぶ機会を提供します。その後、現場での実践に基づきオンラインによるコンサルティングを実施。このような先駆的取り組みを通して、オリンピズムの普及とスポーツ医科学を基盤にスポーツに関わるすべての人をポジティブな経験に導くコーチング文化の創造に貢献していきます。



スポーツ最前線②

スポーツ・フォー・トゥモロー プログラム

Sport for Tomorrowは、2014年から2020年までの7年間で開発途上国をはじめとする100カ国以上・1000万人以上を対象に、日本国政府が推進するスポーツを通じた国際貢献事業。世界のよりよい未来を目指し、スポーツの価値を伝え、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントをあらゆる世代の人々に広げていく取り組みです。このプログラムを着実に実施していくことは、2020年東京大会に向けた日本の国際公約の一つでもあります。Sport for Tomorrowは、おもに次の3つの柱から構成されています。

「戦略的二国間スポーツ国際貢献事業」

おもに開発途上国を対象としてハード・ソフトの両面から、スポーツとオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及のための協力を行う。

「スポーツ・アカデミー形成支援事業」

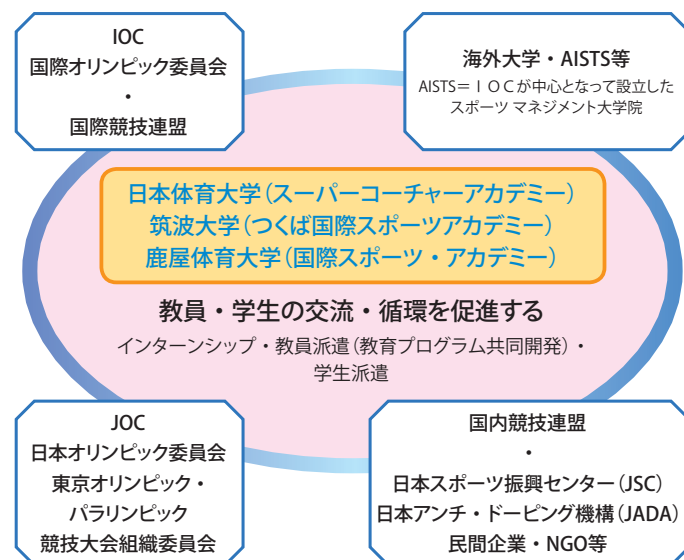
世界各国から将来の国際スポーツ界の核となる人材を受け入れ、養成する国際拠点を形成。オリンピック・パラリンピック教育、スポーツマネジメント、スポーツ医科学、スポーツを通じた国際開発・平和構築、コーチング・体育・日本文化の5領域で実践的な知識を学び合う取り組み。

「国際アンチ・ドーピング強化支援事業」

ユース世代やリーダーを育成するための教育プログラム開発や、アンチ・ドーピング・ムーブメントの展開に向けた活動を、各アンチ・ドーピング関係機関と連携し展開。

NCDAは、この文部科学省「スポーツ・アカデミー形成支援事業」の委託を受けて推進するものです。国際オリンピック委員会 (IOC) 関係者など国際的なスポーツ関係者の招聘、次世代の国際スポーツ界の核となる人材の受け入れ・養成を推進するための国際的な中核拠点を、我が国の体育・スポーツ系大学群と各国の体育・スポーツ系大学間でのネットワークにより構築することを目的としています。

スポーツ・アカデミー形成支援事業の全体像



スポーツを世界と 日本人々のために

スポーツ基本法の前文は、「スポーツは、世界共通の人類の文化である」という一文から始まり、今日スポーツが、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものであること、青少年の育成や、人と人との交流および地域と地域との交流を促進するために大きな役割を果たすことなどが述べられています。これは、「體育富強之基」を建学の精神に、125年にわたりスポーツ文化の奨励・促進に貢献してきた本学の理想と志を同じくするものです。少子高齢化、地域創成などの諸問題を乗り越えるためにも、スポーツによる教育・地域の連携がいっそう重要であり、本学も積極的に推進しています。



Topics 1

名城大学との 包括連携協定



平成26年6月、日本体育大学と名城大学が学校法人同士の立場から包括連携協定を締結し、名城大学天白キャンパス本部で日本体育大学の松浪健四郎理事長と名城大学の小笠原日出男理事長が記者会見に臨み、それぞれ協定提携の意義について述べました。

東京と名古屋に本部を置き、大学を有する学校法人間の包括連携協定締結は初のケースとなります。学校法人名城大学は中部地方を代表する総合大学である名城大学のほかに附属高校1校を設置する法人です。今回の包括連携協定は、両法人の強み生かし、カバーし合いながら、互いの経営資源、教育資源の活用を図るのが大きな狙いです。両大学間では、競合する学部がないため異分野からのアプローチ、学際的な連携が期待され、高校間でも浜松日体中学・高校と名城大学附属高校(名古屋市市中村区)との教諭・生徒間の交流による活性化なども期待されます。具体的な取り組みについては、連携推進協議会が設置され、検討を進めていくことになります。

Topics 2

東京外国語大学との 包括連携協定

平成27年2月に行われた調印式では、来賓の浅野敦行文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課オリンピック・パラリンピック室長の立ち会いのもと、東京外国語大学立石学長と日本体育大学谷釜学長が協定書に署名しました。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催にともない、多くの学生がボランティアとして参加することから、相互の強みを活かした取り組みを推進します。競技面の知識がある本学学生には語学力を、語学力のある東京外国語大学学生には競技の専門的知識の取得を目指した指導を行っていく予定です。また、長期的には、本学としては海外を転戦するトップアスリートや、国際交流としてJICA(国際協力機構)を通じて途上国への指導者として派遣される卒業生への語学指導に、東京外国語大学としては通訳を目指す学生へのスポーツ専門知識の指導などに期待を寄せています。グローバル人材を育成する上で、チャレンジ精神やガッツあふれる姿勢は不可欠であり、切磋琢磨していきたいと考えます。



進む地方自治体等の 体育・スポーツに関する協定

学校法人日本体育大学は、体育・スポーツの振興、オリンピックムーブメントの高揚などを目的に、県や市町村と協定を結んでいます。体育・スポーツ・健康づくりの分野で、学生生徒・教職員・指導者の交流、施設利用や行事・イベント参加による学生・市民の交流、教育・研究・課外活動の協働などを進め、相互の発展に貢献することを目指します。

<おもな提携先例>

・岡山県美作市(平成26年12月)

兵庫県と鳥取県に隣接。美しい里山の風景で人気。宮本武蔵の生誕地とされ生家跡もある。

・愛知県(平成26年12月)

調印式には大村知事が出席。オリンピックムーブメントの高揚とスポーツ交流を促進する。

・和歌山県紀の川市(平成27年2月)

和歌山県北部に位置。猫のタマ駅長で有名になった和歌山電鐵貴志川線が市内を走る。

・大阪府泉佐野市(平成27年2月)

大阪市と和歌山市のほぼ中間に位置。関西国際空港、りんくうタウンは同市にある。

・和歌山県北山村(平成27年2月)

和歌山県にありながら三重県、奈良県に囲まれた、日本で唯一の飛び地の村として有名。

・山梨県小菅村(平成27年2月)

秩父多摩国立公園内にあり、多摩川の源流部に位置。手つかずの自然が残るパワースポット。



※印は今後調印式が実施される予定です。
(3月20日現在)

日体大地域貢献最前線①

「北海道学園」(仮称) 開設へ

学校法人日本体育大学は、我が国初のスポーツ教育を柱とした、男子全寮制の知的障害高等支援学校「北海道学園」(仮称)を、北海道網走市に平成29年4月の開校を目的に設立準備を進めています。この学校は、「スポーツ」、「農業」を取り入れた教育課程で職業訓練を行うとともに、卒業後も「継続的に働くこと」、「地域で自立して生活すること」を目指すものです。

この構想に向け、平成26年8月に、学校法人日本体育大学は、株式会社北海道銀行並びに株式会社道銀地域総合研究所との間で包括連携協定を締結しました。協定書調印式と記者会見は網走セントラルホテルで行われ、学校法人日本体育大学今村裕常務理事、日本体育大学谷釜了正学長、株式会社北海道銀行堀八義博頭取、株式会社道銀地域総合研究所津元淳代表取締役社長が出席し、来賓として水谷洋一網走市長に臨席いただきました。

三者の相互協力によって、地域産業にマッチした職業訓練等の調査研究、卒業生の受け皿環境の調査や情報支援、また道内企業や医療機関との連携についての調査・研究・紹介などの産学連携が期待されます。

日本体育大学はもちろんのこと、日体ファミリーが一つになってあらたな取り組みが動き出しています。その一員であることを誇りに、一人ひとりがその使命を自覚してほしいと思います。

日体大地域貢献最前線②

東日本大震災支援と防災への取り組み

東日本大震災から4年が経ちました。発生直後、早くも5月には本学の学生・教員の有志が、宮城県石巻市において支援活動を行いました。その後も対象地域を広げて支援活動を展開し、瓦礫撤去、授業補助、子どもやお年寄りの健康管理等を行いました。このような取り組みを組織的に継続しています。

平成25年には、総勢約205名の日体大アスリートが岩手県、宮城県、福島県の東北3県を巡り「日体大スポーツキャラバン」を開催しました。これは、伝統の体育研究発表実演会と、現地の学校・体育館等で子どもたちにスポーツの楽しさを知ってもらうスポーツ交流会を同日開催したものです。現地の方々から好評をいただいた一方で、本学にとってもさまざまなことを学ばせていただく貴重な経験となりました。

東日本大震災支援プロジェクトでは、被災地からのニーズにあわせて本学のリソース(支援者=学生・教職員・関係者)をマッチングすることを目指し、スポーツ教室、運動部の指導、子ども向けの運動遊び、スポーツ用品の物資援助、高齢者向けの運動指導、その他(作業、交流)などの活動を行っています。

こうした経緯からも、地域の防災活動にいっそう注力し、さらに保健医療学部開設が弾みとなりました。平成27年3月には第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラムの主旨に賛同・応募し、採用が決定され、仙台市において講演やポスター展示等を行いました。

学 生 サ ポ ー ト 窓 口 紹 介

疑問があったり困ったことがあるときは、気軽に相談してください。日体大とスポーツが大好きな情熱あふれるスタッフばかりです。

SUPPORT

学生生活

のサポート



学生サポートデスク

(東京・世田谷キャンパス教育研究棟 1 階)

学生会館や学生マンションなどの住まいに関する情報の提供や紹介、旅行や運転免許の申し込みも受け付けています。



学生相談

学生生活を送る上でのさまざまな相談（クラブ活動、学業、人間関係、進路など）に、専門のカウンセラーが対応しています。

開室時間：月～金 11:00～17:00



学生支援センター

(東京・世田谷キャンパス教育研究棟 1 階、横浜・健志台キャンパス百年記念館西棟 2～3 階)

履修申告、授業や試験、教育実習や資格等についての手続や相談対応を行っています。学生生活でルールや締切を守することは必須ですからしっかり確認しましょう。また奨学金やアルバイト紹介などの相談にも応じています。



就職支援

(東京・世田谷キャンパス教育研究棟 1 階、横浜・健志台キャンパス百年記念館西棟 3 階)

就職関係情報の収集・提供、セミナーや学内企業説明会の開催などの就職活動支援、就職に関する相談・アドバイスなどを行っています。民間から公務員、教員までさまざまな資料も完備しています。まだ先のことと思うのではなく、早めに行動をはじめよう。



自動証明書発行機

在学証明書、成績証明書、卒業・修了見込証明書、教免取得見込証明書等の発行を受けることができます（有料）。また学割（個人用交付）も発行できるので必要な時に利用しましょう。学生証を必ず携帯してください。その他の証明書は窓口で受け付けます。

(両キャンパス学生支援センターエリア内)



大学は高校の頃とは違い、自身に関わる多くのことを自分で考え、行動を起こさなくてはなりません。たとえば授業の履修のことであったり、生活に関することであったり、就職のことであつたりといったことも、自ら考えて決断していくわけです。しかし、あらゆることを自分の力でいきなりやれと言われてもそれを実行することは困難な事です。そのため学生支援センターでは、「生活支援部門」、「学習支援部門」、「キャリア支援部門」の三つの部署を設け、その道のプロフェッショナルを揃えて学生達の相談に応えています。

大学生になり、これまでと大きく異なる環境の中で不安になったり、悩んだりといったストレスを感じたりすることもあると思います。そんな時は一人で悩むことなく、気軽に学生支援センターに相談に来てください。必ずお役に立てるはずです。



学生支援センター長
八木沢 誠 教授

INTERVIEW
一人で悩まず
気軽に相談を

みなさんの充実した学生生活をさまざまな部署・スタッフがサポートしています。

SUPPORT

健康・スポーツ のサポート



健康管理センター

(東京・世田谷キャンパス教育研究棟 G 階、横浜・健志台キャンパス百年記念館西棟 1 階)

生活・疾病・傷害などの健康に関する問題について、相談員が対応しています。中でもスポーツの傷病については、専門医が相談に応じています。健康な学生生活が送れるよう、定期健康診断、救急看護、疾病・障害の予防、健康相談、保健指導を行っています。



スポーツトレーニングセンター

(東京・世田谷キャンパススポーツ棟 1 階、横浜・健志台キャンパス百年記念館東棟 1 階)

トレーニング系の授業や運動部のトレーニングを主体としたストレッチやコンディショニングとしてのトレーニングおよび実験研究が行える施設です。年間利用者は延べ 10 万人を超えています。

SUPPORT

さまざまな活動 のサポート



国際交流センター

(東京・世田谷キャンパス教育研究棟 1 階)

国際交流の推進を担うセンターです。交換留学についての相談対応、海外派遣事業の紹介、留学生の活動のサポートおよび JICA ボランティア希望学生への語学学習支援プログラムの提供などを行っています。



(社会貢献活動として行われたジュニアスポーツドリームチャレンジ)

スポーツプロモーション・オフィス

(東京・世田谷キャンパス教育研究棟 1 階)

社会貢献活動やボランティア活動のコーディネートを行っています。活動の募集・情報は学内掲示板や n-pass で配信される「社会貢献活動登録」を申請することで提供されます。

SUPPORT

学習 のサポート



図書館

(世田谷本館・健志台分館：平日 8:45 ~ 22:00、土曜日 8:45 ~ 19:00、日曜日 10:15 ~ 18:00 / 保健医療学部図書館：平日 8:45 ~ 19:00、土曜日 10:15 ~ 18:00 = 各館とも通常開館の場合)

授業に関するものはもちろんのこと、幅広い分野の書籍が揃っています。特に体育・スポーツ分野の専門図書は国内随一の規模を誇ります。DVD 視聴スペース、パソコン、グループで閲覧できるスペースも完備しています。



INTERVIEW

図書館利用を 生活の一部に



図書館
山本 美智恵

図書館は学習の場だけでなく、生活の場でもあるよう、みなさんに快適な空間を提供しています。

利用目的に合わせて、集中できる静粛室、話し合いができるグループ閲覧室、出合いの場でもあるオープンな閲覧室等があります。また、約 50 万冊(高校では約 2 万冊)もの蔵書があり、データベースや映像資料の他にも、両キャンパスに百台以上のパソコン、各種雑誌、ベストセラー等みなさんの利用をお待ちしています。また、貸出カウンターとは別に相談窓口を用意しており、資料の探し方、レポートの書き方、パソコンの使い方等もサポートしています。お気軽に声をかけてください。

図書館はただ本を読むだけ、勉強するだけの場所ではありません。夜 10 時まで憩える居場所として、日常生活に図書館を組み込んで、図書館利用を生活の一部としてください。

選手を見る目を磨き、自分の軸を信じて光る逸材を発掘する。 日体大の人的ネットワークもスカウト活動の武器に。

期待の新人としてプロ野球デビューした佐藤充氏。その後、故障に悩まされ引退を決意したが、現在は中日ドラゴンズ球団スカウトとして活躍している。若い選手に注ぐ温かい視線は、ライバルと切磋琢磨した日体大時代の経験、プロとしてのご自身の苦勞によって培われたものかもしれない。日体大出身の指導者・教員との輪を大切にしながら、今日も各地の大会・学校を巡っている。

醍醐味は期待を寄せた選手が活躍すること

私が現職である中日ドラゴンズの球団スカウトになったのが、2012年です。スカウトの仕事は、その年のドラフト会議での指名の対象になり得る選手を年明けにリストアップして、1年をかけてその候補選手たちを追いかけて、10月末のドラフト会議までに指名選手を絞り込んでいく作業が中心になります。現在は地域担当制になっており、全国をエリア分けして、振り分けられた担当者が担当エリアを1年かけて見て回って指名候補選手をリストアップしていきます。私は関東地区の中で、主に東京、神奈川、茨城、千葉といった南関東を中心に担当しています。

基本的なスカウト活動のタイムスケジュールは、大会期間中は例えば9時プレーボールの試合を皮切りに、1日に3、4試合を視察。球場で知っている監督をお見かけした場合は、挨拶にうかがった上でお話をします。また大会がない時期には学校への視察がメインになります。

スカウトを始めた当初は、ほとんど選手の知識がない状況でスタートしましたから、選手を見に行くことで精一杯でした。ただ、長くやっていると自分なりの目が培われてきました。担当した選手が中日に入団するケースもありますし、自分が良いと思っていた選手がたとえほかの球団で活躍することになったとしても、自分の見る目が間違っていなかったと確信でき、それがスカウトの仕事に対するモチベーションにもつながっています。

まだスカウトの仕事始めて間もない私ですが、スカウト活動で

大事にしていることは、何か一つでも光るものを見せてくれる選手を見逃さないことです。今はこれだけインターネットが普及している時代ですから、なんらかの形で人目に触れている選手がほとんどです。ドラフトで上位に指名される選手は誰が見ても素材が良いですし、そうした時代で隠れた逸材を探すことは難しい。その中で私は情報や先入観にとらわれ過ぎると周りが見えなくなるタイプなので、漠然と俯瞰して試合を見ながら、隠れた逸材を探すことがあります。基本的なことができるのは大前提ですが、肩の強さでも、足の速さでも、負けん気の強さでも、漠然と俯瞰している中で何か一つでも光るものを見付けられれば、次もこの選手を見ようという気持ちになります。光るものを出してくれる選手を見逃さずに拾っていくのは、スカウトをする上で重要なポイントだと思っています。



活躍する

OB

中日ドラゴンズ
球団スカウト
佐藤 充氏

INTERVIEW

現役時代、最も苦手だった選手は…

現役当時の私がどうだったか。振り返ると一生懸命にプレーはしていましたが、プレーヤーとして自分本位の経験から物事を考えることが多かったと思います。今は現場を離れて、方法論や感覚的なことまでいろいろな意見に耳を傾けていますが、広く意見を聞くことの重要性を分かっていたら、もっと長く現役を続けられたかもしれないと思うことがあります。

プロ初勝利は2005年の甲子園での阪神タイガース戦。試合の前日には雨が降っていて、「明日、試合をできないのでは？」という状況下で先発の機会が回ってきました。結果的に初勝利となりましたが、一歩間違えば逆転されていたゲームで、あまり周りのことを考える余裕もありませんでした。ウイニングボールは家に大切に保管してあります。抑えのエースである岩瀬（仁紀）さんが、セーブを記録した試合後にウイニングボールを受け取りました。そのシーズの開幕前に肘の手術を受け、復帰を果たしてからプロ初勝利を達成できたので、ようやくプロとしてスタートラインに立てたという思いでした。

プロ生活で最も苦手としていたバッテリーは同級生の岩村明憲（ヤクルト、楽天、レイズ、パイレーツなど）。対戦の機会はそれほど多くなかったのですが、うまく間を合わされてしまうというか、感覚的に苦手意識がありました。日体大の4年生の時に一緒にヤクルトのキャンプに参加して、知っている仲でしたし、プロに入って最初に打たれた印象が残っているからでしょうか。岩村に打たれる気はさらさらありませんでしたが、なんとなく感覚的に投げづらかったことを覚えています。

日体大OBの人脈は、他大学にはない武器

私が日体大に入学したきっかけは、高校の先生から「お前は日体大に行け」という強い推薦があったからです。当時の野球部の同期の推薦入学者は9人。私は甲子園出場経験がありませんでしたが、選抜高校野球も含めた甲子園経験者は7人いました。その中でも広島の高陽東高校を甲子園ベスト4に導き、日体大に入ってきた宗政徳道選手はすごかったですね。彼は入部後、すぐに首都大学リーグ戦で登板していましたし、ピッチャーとして出場しない時はDH（指名打者）で出場していました。「彼がいる限り試合には出られないだろうな」と思ってしまうほど、とにかくすごかったです。ただ、一番勝たないといけないライバルが目の前にいることは恵まれていたと思います。正直、私は練習が好きではなかったのですが、何をやるにしても、彼の一步先を行こう、一つでも上に行こうと張り合っていました。試合に出る出ないは別の問題として、彼のようなライバルのおかげで常に高い意識を持つことができました。常に上を目指して取り組んだ経験が、その後の人生に良い影響を与えてくれたと思っています。

ただ、日体大野球部に在籍した4年間の結果という意味では、悔いが残っています。優勝を経験したのは2年生の時の秋のリーグ戦のみ。私たちの代はあと一歩まで優勝という段階まで行きながら、結局優勝には至りませんでしたので、悔しさが残っています。一つでも優勝を経験していれば、もっと良い思い出になったかもしれません。リーグ戦や全国大会で名だたるバッテリーと対戦することを目指して練習に励んでいました。

そんな日体大での野球部生活でしたが、大学を卒業したあとは、日体大OBが全国にたくさんいることの価値を痛感しています。スカウト活動をする過程で、第一線で活躍する日体大OBの方の助けを借りながら仕事ができているし、非常にありがたいことで感謝しています。

スカウト活動をする中で一人でも何千人もいる選手を見ることはできませんから、一番確かな目を持っている現場の監督さんに貴重な情報をいただいて、新しい選手を視察することもあります。また、日体大OBの監督さんに別の監督さんを紹介いただくこともありますし、あまり行かなかったことがない地域に日体大OBの監督さんがいらつければ、後輩だからと食事に誘っていただき、その場で貴重な情報をいただくことも少なくありません。そういったことは他の大学にはない武器だと思っています。情報網を手広く持つていないと、スカウト活動はできませんから。

私の上司にあたる中日の中田宗男スカウト部長は、日体大の大先輩でもあります。プロ野球のスカウト界でも一目置かれる存在です。身近にいただけのものすごく高い山だと感じています。ただ、尊敬している方と一緒に仕事ができるのは貴重な時間であり、目標にしていくべき存在だと思っています。物の見方や考え、選手を見る目など、中田スカウト部長の姿を追い求めていけば、自分の見る目も確立できると思っています。自分の目が持てないとドラフト会議で指名する選手を決める時に、信念が揺らいでしまいます。「誰が何と言おうとこの選手なんだ」という自分の見る目と信念がないと、指名選手を一本化できませんし、強く推薦はできません。

中田部長の姿を見ていて感じることは、見る目を養うためには、若い時にどれだけ数多く現場で選手を見ているかに尽きると思います。早い段階から選手を見ていく、現場に足を運ぶことの重要性を痛感しています。現代は映像や動画などいろいろな選手を見ることが可能ですが、現場の雰囲気や間合い、言葉では言い表せない感覚的なものは画面を通してだけでは伝わってきません。何を意識してプレーしているのか、どういう準備をして試合に臨んでいるのか、そういったことを感じ取れる感性をもっと養うことで自分の見る目を確立していきたいと思っています。

私から日体大の学生に伝えたいメッセージは、4年間の学生生活という限られた時間の中で、その時にしかできないことを、悔いを残さずやり切ったほうがいいことです。現役の学生が頑張ることの後輩のための新しい道ができてくるものですし、自分のことを第一に考えて行動していたとしても、その結果で後輩の道が作られることもあります。日体大でプレーすることを誇りに頑張ってください。全力で物事に取り組める人間は、その先どこへ行っても何かを成し遂げることができると思います。無理だと自分で線引きをしてしまえば、どこへ行っても線引きをすることになります。たとえ最初は指示されてやったことだとしても、最後までやり切ることができれば、後々それが自分の武器となると思います。



PROFILE

佐藤充（さとう・みつる）

1978年4月29日生まれ、埼玉県出身。埼玉県立坂戸西高校を経て、97年に日本体育大学に入学。99年には首都大学野球リーグのベストナインを受賞した。大学卒業後は日本生命に入社し、02年の第29回社会人野球選手権では日本生命の優勝に貢献。03年のドラフト会議で中日ドラゴンズから4位指名を受けて念願のプロ生活が始まった。06年にはセ・パ交流戦で最多の5勝を挙げ、日本生命賞を受賞。また同年はシーズン9勝を記録して、チームのリーグ優勝に貢献している。その後は負傷に苦しみ、10年限りで中日を退団。11年には東北楽天ゴールデンイーグルスの入団テストを受けて、育成選手として契約したものの、同年限りで現役引退を決断。12年からは中日のスカウトを務める。



体育科教育学と教員・指導者のさらなる質的向上を目指して 優れた方法論や経験を実証・普及させていく。

<体育科学研究科 博士課程前期 体育実践学コース スポーツ教育・健康教育学系>

日体大には教員や指導者を目指す学生が多いことは周知のことである。では、優れた教員はどのように生徒と関わり指導するのか。経験や感覚では理解していても、それをデータや考察に基づき、体系化して捉える機会は少ないのではないだろうか。これからの教員・指導者は現場に出てからも実践と考察を繰り返し学び続けることが必要だ。体育科教育学と指導を担う人材の質的向上に向けて研究に取り組む近藤智靖教授に話を聞いた。

研究主題は質の高い教育者を養成する体育科教育学の追究

—まずは近藤先生の研究テーマから教えてください。

私は体育科教育学を研究しています。体育科教育学とは、質の高い教育者を養成するための研究で、授業において教師が生徒にどのような言葉をかければいいのか、生徒たちの学習態度や技能が現状はどうなっているのかを研究します。また、文部科学省が規定する学習指導要領の研究や、日本国内だけではなく、海外の体育の授業を研究し、諸外国の体育科教育の制度を学ぶことで、それをどのように日本でアレンジしていくのかを考察しています。

—特に学生にとって関心の高いテーマは何でしょうか？

多くの学生は教員免許を取得します。教師になりたいという学生にとっては、生徒にどういふ声をかけたいのかということに興味・関心があると思います。例えば、生徒を褒めることがどういふ意味を持つのか。運動が不得手な生徒にどういふ声をかければいいのか。それを考えるために、生徒の性格やこれまでの経験も参考になりますが、一般原則を学ぶ必要があります。また、教師が生徒の前で授業をするときに必要以上に話が長くなったり、50分の授業を任せられても、準備してきたことを表現できずに授業の内容が薄くなって30分で終わってしまった

り、説明の手際が悪くて授業が結局60分かかってしまったということがあります。そうならないようにどのように時間をコントロールすればいいのか、私たちは研究で得られたデータと映像をもとにその方法論を教えてくださいます。学校教育の現場で教師になろうとする人は、自分が出会った良い指導者の教え方を参考にするがありますが、感覚的ではなく、理論を学びそれをもとに客観的に自分の経験を分析していく機会はなかなかないでしょう。経験則に基づくとばかりではなく、理論や実証的に研究していく必要性を学生に提示することで、考えるきっかけを与えることも重要な使命だと思っています。

—質の高いデータをどのような形で収集しているのでしょうか？

教え方が上手な教師を訪問し、教師にマイクをつけて発する言語を全部拾っています。上手な教師はどのような褒め言葉を何回言っているのか、褒め言葉でも具体的にどんな話をしているのか。一生懸命にアドバイスをする教師がいる一方で、単純な言葉でアドバイスをする教師もいます。それらをいくつかの言葉に分類して、良い教師にはどういふ特徴があるのか、生徒にどういふ言葉をかけているのか、何十人もの教師の中からいくつかの傾向を読み取るのです。一人の教師につき合計8時間から10時間映像を撮影するケースもあり手間のかかる作業です。撮影した映像を研究することで、生徒の名前を呼んでから指示を伝えている教師や、生徒と共感している



PROFILE

近藤智靖 教授

近藤智靖（こんどうともやす）東京都出身。児童スポーツ教育学部児童スポーツ教育学科教授。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士課程修了。博士（体育科学）。北海道で教師を務めていた27歳のときに一念発起して体育科教育学の研究の世界に飛び込む。2011年4月1日付で日体大に着任した。近著に『新版 体育科教育学入門』。息抜きの時間は4歳になる娘さんと遊ぶこと。プライベートでは子煩悩な側面を持つ。

また、同時に運動のできない生徒がどんな立場に置かれるのか、運動ができる生徒はどう取り組んでいるのかも研究しています。運動が不得手な生徒はどの時代にもいますが、いまの時代の子どもたちは屋外で遊ぶことは少なく、体を動かなくても生活できる生活器具も普及しているため、昔に比べれば身体活動量が落ちていることは事実です。その一方でトップスポーツのジュニアの選手が世界で好成績を残しているように、同じ授業の中でも格段に能力の高い子供とあまり運動をせずに学齢期を迎

ことを認識させながら指導する教師が良い成果を残す傾向にあることが分かってきました。そうした教え方の上手な教師に教わるのが生徒のモチベーションと技能の向上につながり、教師を好きになるといふサイクルが生まれていきます。かつては良いパーソナリティーを持つ教師が素晴らしいという評価がされてきましたが、それぞれの教師の背景にはそれぞれのメソッドがあつて、それを洗い出さないと、その人だけの宝物になつてしまい、学校内のほかの教師と共有できません。繰り返しになりますが、体育科教育学の研究が始まって30年以上経つ中で、職人気質の教師の優れた教え方が、なかなか普及や一般化されない傾向がありました。良いメソッドを一般的に理論化や数値化することで、多くの人がそのデータを見たときに共感・理解できるように知見を提供することが、教員養成や生徒自身のためになりますので、良い教師の授業を撮影して持ち帰る活動を行っています。





体育科学を リードする

～大学院・研究科の取り組み～

6

えている子供の差が非常に大きくなっているのが近年の傾向です。まさに二極化ですが、そういった事情の中で一人の教師が一手に体育科教育を引き受けることになります。どちらにターゲットを置くかは難しいですが、運動が得意な生徒と不得手な生徒を組み合わせて教える際に、不得手な生徒の視点からアプローチすることを大切にしています。ただし、運動が得意な子と不得手な子とを分離するのではなく、お互いが良いパートナー関係になれるような指導方法も提案しています。運動が得意な生徒と運動が不得手な生徒が教え合って関わり合うことで、心と学びがさらに深く豊かなものになるでしょう。

日体大の強みは豊富なOB・OG より良い研究成果を残す責任

—先生がこの研究を始められたきっかけを教えてください。

もともとは教師になりたかったので、大学院の修士課程に進んだのですが、北海道で小学校の教師を務めいろいろと思い悩む中で、優秀な体育教師を養成する体育科教育学の研究をしたいと思ひ立ちました。それから筑波大学に進み、さらにこの分野を極め、研究結果を学校現場の教師やこれから教師になろうとしている学生に還元したいという情熱でここまでやってきました。教師をわずか2年で辞めて学生に戻り、当時は無職だったわけです。教師を辞めてからは研究をやりたいという気持ちのほうが強かったのですが、その結果、生活苦にはなりました(苦笑)。ただそれは全部自分の責任です。やらないで後悔するよりも、やって後悔したほうが良いと、『飛んで火に入る夏の虫』という覚悟で自らこの世界に飛び込みました。

—先生の研究において日体大だからこそできる強みはありますか？

日体大は120年を超える歴史を持つ体育大学ですから、全国各地にOB・OGがいます。体育教師

の全体の4分の1を日体大のOB・OGが占めるという統計もあります。そのため、学生も教師志向が高いです。教師になりたいという学生が多いことで、一緒にいろいろなプロジェクトをしかけることが比較的容易ですし、数多くのアスリートや体育教師を養成してきたために、協力体制を築くのも敷居が低いです。学校教育の現場でも日体大出身と言えば周囲の目も違います。その一方で日体大という看板は大きいため、そのぶん責任や影響力も大きいですから、そういったことを自覚して研究に取り組み、より良い研究成果を出さなければなりません。

体育科教育学の人材養成と 体育教科自体の地位向上を

—今後の展望は？

近年の教員養成は修士に軸足が置かれようとしているのが全体的な傾向です。文部科学省は高度化もしくは修士化と呼んでいるのですが、体育科教育学をもっと専門的に学びたい、学ぶであろう現職の教師がますます増えてくると思っています。体育科教育学の研究に関しても、まだまだ人材が不足する分野があります。例えば、ボール運動の研究者はたくさんいますが、鉄棒などの器械体操やダンスなど、見逃されている、もしくは研究者が少ない分野もあります。こうした分野を学ぶ学生を養成して、どの分野も研究を充実させていきたいと思います。

さらに、体育科教育学の人材養成とは別に、体育という教科の評価をいっそう高めていきたいと考えています。海外では、国によっては、体育科の授業がない例もあります。国によって温度差が大きいのも事実なのです。体育という教科があつて当たり前ではなく、常に危機感をもっています。生徒の発達や健康にとつても体育はとても大切でありそれを守ることに必要です。そのためには体育教師自体のステータスを上げていくことが、同時に私たちの活躍の場の持続的な確保につながります。質の高い教師を輩出して、体育科教育の地位を守っていくことが大事

です。日体大に入学した学生や運動を教えたい、教師になりたいという学生の将来の道を広げることが重要な課題だと思っています。



—最後に大学院を目指す学生に向けてのメッセージを。

勉強したい、いろいろなことを身に付けたいと思っている学生は思い切つて大学院に飛び込んでほしいと思います。日体大はもちろんのこと、日本全国・世界から、教員や指導者を目指すという志がある方は集まつて来てください。

私自身、一方的に教えるだけではなく、学生から学ぶことも多いです。例えば、野球やソフトボールは運動量も少ないですし、ボールを打つことが危険でもあるので、野球やソフトボールを研究には使つてきませんでしたが、あたかも野球をやったかのように、打った瞬間にボールが飛ぶ感覚を味わえる道具を、工夫して体現した学生がいました。私はこういうやり方もあるのかと感心しました。教える側も学生との関係性があつて初めて意味のある存在となるのです。これからは学生とともに学び合つて成長できればと思います。また、ほかの大学の学生からも面白いと思つていただける研究室にしたいです。そのほかに伝えたいことは、体育教師は運動だけができればいいわけではありません。本を読むクセを付ける、基礎学力を身につけることも重視してほしいです。体育科教育学はスポーツ科学として成り立っています。その分野の専門知識はもちろんのこと、プラスαとしての基礎知識や基礎教養も身につけてください。将来の希望が広がる学びや研究をこれからも続けていきたいと思います。



平成26年度 全日本学生選手権以上の大会で優勝を収めた大会成績一覧

団 体 名	大 会 成 績
アーチェリー部	第49回全日本学生アーチェリー女子王座決定戦 団体(中村美樹、西野汐梨、古城 碧、遠間あずさ) 第53回全日本学生アーチェリー個人選手権大会 コンパウンド部門女子 個人 谷國 彩夏
カヌー部	2014全日本長良川カヌー長距離選手権大会 C-1 15,000M 井澤一彰
サッカー女子	第23回全日本大学女子サッカー選手権大会
自転車競技部	アジア選手権大会 ポイントレース 中村妃智 第55回全日本学生選手権トラック自転車競技大会 ポイントレース 小林泰正 第2回夏季ユース・オリンピック競技大会女子ロードタイムトライアル 坂口聖香 文部科学大臣杯 第70回 全日本大学対抗選手権 自転車競技大会 総合(女子) ＜3Kmインディビジュアルバシュート＞中村 妃智／＜女子ポイントレース＞中村妃智／＜女子チームスプリント＞中村妃智、齊藤望 第20回日韓対抗学生自転車競技大会 ポイントレース 小林泰正
少林寺拳法部	第48回全日本学生少林寺拳法大会 ＜男子初段の部＞勝田将輝 鈴木康平／＜三人掛けの部＞青木拓磨、下山祥来、友井啓了／＜単独段外の部＞石川広都 ＜女子団体の部＞林恵理子、野井加奈子、久留山織、畔蒜みく、杉森郁美、宇野真理奈 ＜競泳ブロック＞ 第90回日本学生選手権大会水泳競技大会 【団体】女子総合
水泳部	【個人】＜200M自由形＞ 五十嵐千尋／＜100・200M背泳ぎ＞ 赤瀬紗也香／＜200M個人メドレー＞清水咲子 ＜400M個人メドレー＞大塚美優／＜400Mメドレーリレー＞赤瀬紗也香、高橋美帆、清水咲子、五十嵐千尋 ＜水球ブロック＞ 第90回日本学生選手権水泳競技大会 男子 第90回日本選手権水泳競技大会 男子 ＜飛込ブロック＞ 第90回日本学生選手権水泳競技大会 男女団体 【個人】3M飛板飛込 坂井丞
スキー部	第56回雪印メグミルク杯全日本ジャンプ大会 高梨沙羅 FIS ワールドカップ第2.3.11.12.13.戦 高梨沙羅 ユニバーシアード冬季大会 スノーボード男子ハーフパイプ 子出藤歩夢
スケート部	日本学生氷上競技選手権大会 1000m 高木美帆 世界距離別スピードスケート選手権大会 チームバシュート 高木美帆
相撲部	第92回全国学生相撲選手権大会 団体優勝
ソフトテニス部	全日本学生ソフトテニス大会 女子団体 第56回全日本学生ソフトテニスシングルス選手権大会 井口雄介 【男子】 第68回全日本学生体操競技選手権大会 団体 ＜個人 あん馬＞長谷川智将／＜個人 平行棒＞神本雄也／＜個人 鉄棒＞横山 聖 【女子】 第68回全日本学生体操競技選手権大会 団体 第68回全日本体操団体選手権大会 団体
卓球部	第11回全日本学生選抜卓球選手権大会 女子シングルス優勝 温磐
トライアスロン部	2014 日本学生トライアスロン選手権 観音寺大会 女子選手権 団体戦 (川添美佳、根本新菜、孫崎虹奈)
トランポリン競技	第51回全日本選手権大会 女子シנקロ 第49回全日本学生トランポリン競技選手権大会 大学対抗戦 女子
軟式野球部女子	第28回全日本大学女子野球選手権大会
バドミントン部	第2回全日本学生ミックスダブルス選手権大会 竹内義憲・木戸よし美
バレーボール部女子	第61回秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会ミキブレーススーパーカレッジ 2014
フェンシング部	全日本学生フェンシング選手権大会 女子エペ個人 堀川こず恵
ボート部	第92回全日本選手権大会 女子舵手付きクロードブル(W4×+)加藤早織、石鍋綾香、川本藍、高橋みのり ○全日本選手権 ブール ＜4×50m障害物リレー＞川嶋駿介／＜50mマネキンキャリー＞坂本佳風子 ＜200mスーパーライフセーバー(NR)、4×50障害物リレー(TR)＞坂本陸／＜メドレーリレー＞小林愛菜、佐藤亜耶、江部愛里菜、渡邊来美 ○全日本選手権 海 ＜ビーチリレー＞七海元紀、石井雄大、森新太郎、岩井寛文／＜チューブレスキュー・サーフレース＞坂本佳風子 ＜ビーチスプリント＞長野文音、森新太郎／＜レスキューチューブレスキュー(ドラッカー)＞藤戸芽来、林明那／＜2キロビーチ＞鈴木友三朗／＜チューブレスキュー(P)＞江部愛里菜 ○学生選手権 ブール＜4×25mマネキンリレー・障害物リレー＞榎野圭祐／＜50mマネキンキャリー、100mマネキンウ・ウィズフィン、特別種目メドレーリレー＞坂本佳風子 ＜4×25マネキンリレー(NR)＞坂本陸／＜特別リレー＞小林愛菜、江部愛里菜／＜スーパーライフセーバー＞江部愛里菜／＜キャリーウィズフィン＞渡邊来美 ＜マネキンリレー＞鈴木健一、鈴木友三朗／＜障害物リレー＞鈴木健一 ○学生選手権 海＜ビーチリレー＞七海元紀、小椋隆繼、大西まりの、長野文音、森新太郎、岩井寛文、山田未来、渡邊来美 ＜ビーチスプリント＞長野文音／＜1×3ビーチリレー＞奥秋李果、山田美月／＜1キロ×3＞岩名地優、鈴木友三朗、渡邊来美 ○全日本種目別選手権大会＜サーフレース＞坂本陸
ラグビー部女子	第1回全国女子ラグビーフットボール選手権大会
陸上競技部	天皇賜盃第83回日本学生陸上対抗選手権大会 女子400m 長谷川美里(4年) 全日本選手権大会 ＜フリースタイル61kg＞中野晶太／＜グレコローマンスタイル59kg＞太田忍／＜グレコローマンスタイル66kg＞宮城辰司 ＜グレコローマンスタイル71kg＞屋比久翔平／＜グレコローマンスタイル98kg＞奈良勇太
レスリング部	全日本選抜大会 女子フリースタイル55kg 浜田千穂 世界選手権大会 女子フリースタイル55kg 浜田千穂 全日本大学選手権大会 ＜グレコローマンスタイル59kg＞太田忍 ＜グレコローマンスタイル71kg＞屋比久翔平
アルティメットチーム	第25回全日本大学アルティメット選手権大会 ウィメン部門 第25回全日本大学アルティメット選手権大会 オープン部門
エアロビクス同好会	第14回全日本エアロビクス選手権大会 チーム部門
スカッシュ同好会	第40回全日本学生スカッシュ選手権大会 団体戦 男子チーム
セパタクロ同好会	第22回全日本学生セパタクロ選手権大会 男子 日体A(中島涼、田辺裕太、長谷川奨) 第22回全日本学生セパタクロ選手権大会 女子 日体B(長谷川菜、渡邊しおり、田中結理)
ダブルダッチサークル	第41回ADLL World Invitational Campionship シングルスダブルス優勝(大川樹里、坂井和也、淵貝証也、岩間祥汰、高橋瑞希)
アクアスポーツ研究会	第21回全日本スポーツダイビング室内選手権 100Mレスキュー女子
混合バレーボール同好会	第13回全日本混合バレーボール選手権大会
タッチラグビーサークル	全日本選手権大会 アベック優勝
フィンスイミングクラブ	フィンスイミング短水路日本選手権大会 男子総合 女子総合



平成26年度学生会祝勝会



TOPICS

平成27年度 入学試験結果

■日本体育大学 体育学部 ※ () 内は女子内数 ※倍率＝受験者数÷合格者数
平成27年3月16日現在 アドミSSIONセンター

区 分		志願者数	受験者数	合格者数	倍率
体 育 学 科	A O	520 (169)	513 (167)	185 (69)	2.77
	推 薦	545 (183)	545 (183)	430 (138)	1.27
	一 般	1455 (354)	1414 (344)	211 (62)	6.70
	学科計	2520 (706)	2472 (694)	826 (269)	2.99
健 康 学 科	A O	59 (44)	58 (43)	27 (18)	2.15
	推 薦	39 (31)	39 (31)	22 (20)	1.77
	一 般	836 (278)	814 (274)	217 (76)	3.75
	学科計	934 (353)	911 (348)	266 (114)	3.42
武 道 学 科	A O	116 (27)	115 (27)	87 (23)	1.32
	推 薦	32 (6)	32 (6)	30 (6)	1.07
	一 般	74 (18)	71 (17)	39 (8)	1.82
	学科計	222 (51)	218 (50)	156 (37)	1.40
社会体育学科	A O	134 (54)	134 (54)	48 (30)	2.79
	推 薦	33 (15)	33 (15)	25 (12)	1.32
	一 般	895 (202)	874 (197)	187 (44)	4.67
	学科計	1062 (271)	1041 (266)	260 (86)	4.00
合 計	A O	829 (294)	820 (291)	347 (140)	2.36
	推 薦	649 (235)	649 (235)	507 (176)	1.28
	一 般	3260 (852)	3173 (832)	654 (190)	4.85
	総合計	4738 (1381)	4642 (1358)	1508 (506)	3.08

※ A O入試はトップアスリート A O入試Ⅰ期・Ⅱ期、学科 A O入試、併設校 A O入試、地域ブロック A O入試を含む。
※推薦入試は推薦入試Ⅰ期、推薦入試Ⅱ期を含む。
※一般入試は一般入試前期、一般入試後期、外国人留学生入試を含む。
※一般入試合格者は補欠繰上合格者を含む。
※帰国生入試、リカレント入試、外国人留学生入試、飛び入学入試は出願なし。

■日本体育大学大学院 体育科学研究科

区 分	博士前期課程		
	志願者数	受験者数	合格者数
スポーツ文化・社会科学系	14 (2)	14 (2)	11 (2)
トレーニング科学系	8 (2)	8 (2)	6 (2)
健康科学・スポーツ医科学系	9 (4)	9 (4)	5 (2)
コーチング学系	17 (5)	17 (5)	10 (4)
スポーツ教育・健康教育学系	7 (3)	7 (3)	6 (2)
合 計	55 (16)	55 (16)	38 (12)

区 分	博士後期課程		
	志願者数	受験者数	合格者数
スポーツ文化・社会科学系	3 (1)	3 (1)	2 (1)
トレーニング科学系	0 (0)	0 (0)	0 (0)
健康科学・スポーツ医科学系	6 (3)	6 (3)	3 (2)
教育・コーチング学系	3 (0)	3 (0)	3 (0)
合 計	12 (4)	12 (4)	8 (3)

■日本体育大学 児童スポーツ教育学部 児童スポーツ教育学科

区 分	志願者数	受験者数	合格者数	倍率	
児童スポーツ 教育コース	A O	91 (54)	91 (54)	27 (17)	3.37
	推 薦	101 (59)	101 (59)	73 (50)	1.38
	一 般	556 (232)	529 (223)	107 (47)	4.94
	合 計	748 (345)	721 (336)	207 (114)	3.48
幼 児 教 育 保 育 コース	A O	38 (35)	37 (34)	13 (13)	2.85
	推 薦	32 (30)	32 (30)	24 (22)	1.33
	一 般	88 (81)	83 (76)	24 (24)	3.46
	合 計	158 (146)	152 (140)	61 (59)	2.49
合 計	A O	129 (89)	128 (88)	40 (30)	3.20
	推 薦	133 (89)	133 (89)	97 (72)	1.37
	一 般	644 (313)	612 (299)	131 (71)	4.67
	合 計	906 (491)	873 (476)	268 (173)	3.26

※ A O入試は学科 A O入試、併設校 A O入試を含む。
※一般入試は一般入試前期、一般入試後期、帰国生入試を含む。
※一般入試合格者は補欠繰上合格者を含む。
※リカレント入試は出願なし。

■日本体育大学 保健医療学部

区 分		志願者数	受験者数	合格者数	倍率
整復医療学科	A O	42 (19)	42 (19)	38 (19)	1.11
	推 薦	34 (17)	34 (17)	34 (17)	1.00
	一 般	101 (26)	94 (24)	35 (13)	2.69
	合 計	177 (62)	170 (60)	107 (49)	1.59
救急医療学科	A O	35 (7)	34 (7)	31 (6)	1.10
	推 薦	23 (5)	23 (5)	21 (4)	1.10
	一 般	121 (20)	109 (17)	59 (12)	1.85
	合 計	179 (32)	166 (29)	111 (22)	1.50
合 計	A O	77 (26)	76 (26)	69 (25)	1.10
	推 薦	57 (22)	57 (22)	55 (21)	1.04
	一 般	222 (46)	203 (41)	94 (25)	2.16
	合 計	356 (94)	336 (89)	218 (71)	1.54

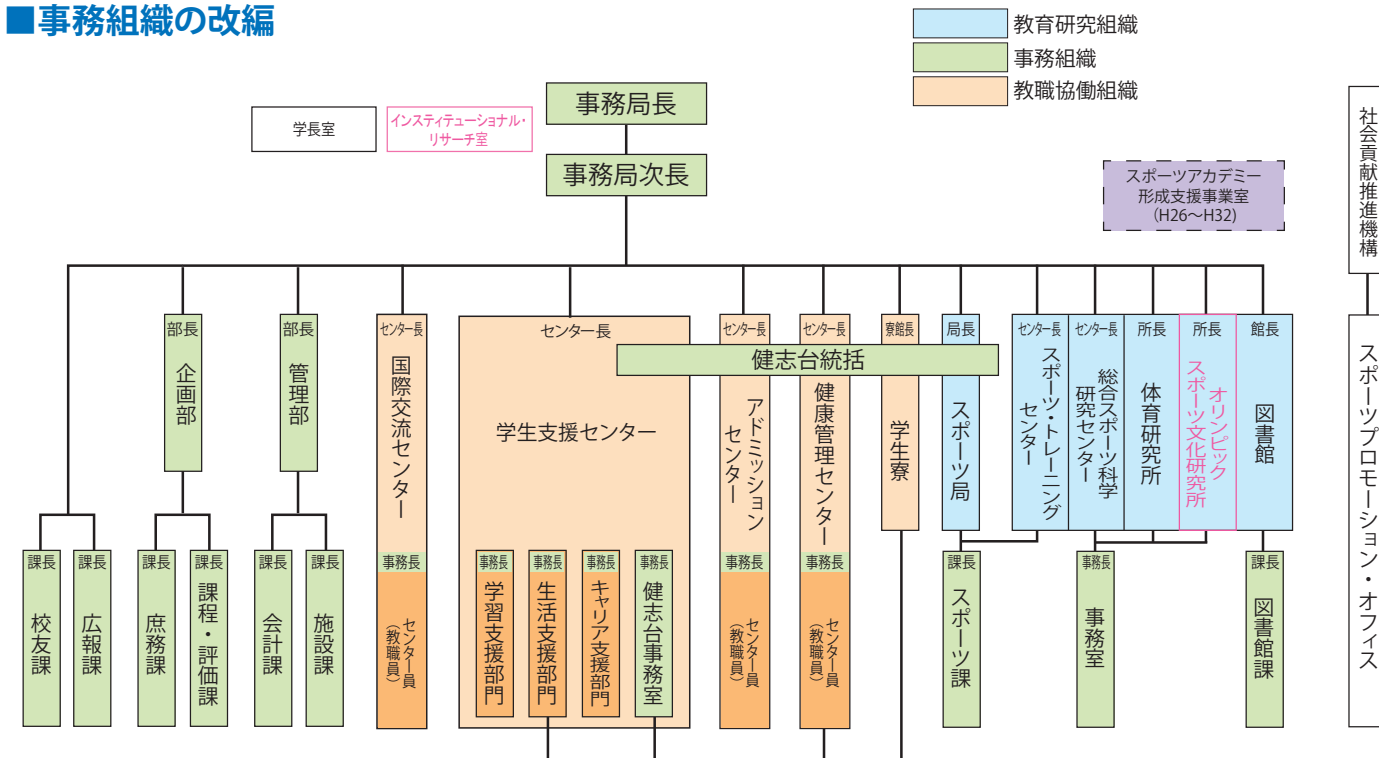
※ A O入試は学科 A O入試、併設校 A O入試を含む。
※一般入試は一般入試前期、一般入試後期を含む。
※一般入試合格者は補欠繰上合格者を含む。
※帰国生入試、リカレント入試は出願なし。

■日本体育大学 体育学部 編入学

区 分	志願者数	受験者数	合格者数
編入学試験	8 (4)	8 (4)	8 (4)
編入学試験 (二次募集)	3 (0)	3 (0)	3 (0)

TOPICS

■事務組織の改編



■平成27年度 学年暦

月 日	行 事
平成27 2015	2(木)～5(日) 新入生オリエンテーション(健康診断他)
4	3(金) 入学式
6(月)	前学期授業開始
29(水)	昭和の日(通常授業)
上旬～	養護実習(健康学科・健康教育専攻4年)
5	7(木) 4/29の振替休日
8(金)	7/20の振替休日
下旬～	教育実習(保健体育)(体育学部4年)
6	13(土)、14(日)、20(土)、21(日) ウォーターセーフティ 理論・実習(社会体育学科3年)
上旬～	教育実習I(小学校)(児童スポーツ教育コース3年)
下旬～	相談援助実習(健康学科・福祉支援専攻4年)24日間以上
7	4(土)～12(日) 夏季実習期間
4(土)～11(土)	野外活動実習(保健医療学部1年)
4(土)～11(土)	キャンプ実習(体育学部2年)
5(日)～11(土)	海浜実習(体育学部2年)
5(日)～11(土)	野外活動実習(児童スポーツ教育学部1年)
6(月)～9(木)	ゴルフ理論・実習(社会体育学科3年)
20(月)	海の日(通常授業)
31(金)	前学期授業終了
下旬～3月末	介護等体験(体育学部2年・児童スポーツ教育学部2年)
	社会福祉施設[5日間] 特別支援学校[2日間]
8	上旬～9月上旬 看護臨床実習(健康学科ヘルスプロモーション3年)[4週間以上]
3(月)～7(金)	前学期補講、追・再試験期間(体育・児童スポーツ教育学部)
3(月)～7(金)	定期試験(保健医療学部)
31(月)～9/4(金)	補講(保健医療学部)
10(月)～9/23(水)	夏季休業
上旬～	社会教育実習(社会体育学科3年)[9月下旬まで]
上旬～	保育実習I(児童スポーツ教育学部3年)
9	2(水)～12(土) キャンプ理論・実習(社会体育学科3年)
7(月)～11(金)	追・再試験(保健医療学部)
8(火)～18(金)	マリンスポーツ理論・実習(社会体育学科2年)
20(日)	開学記念日
下旬～	教育実習I(幼稚園)(幼児教育保育コース3年)
24(木)	後学期授業開始
24(木)～10/7(水)	ホームルーム期間
10	12(月) 体育の日(通常授業)
29(木)	10/12の振替休日
30(金)	11/23の振替休日
29(木)～11/1(日)	日体フェスティバル期間(準備日含む) ※この期間は通常授業なし
11	23(月) 勤労感謝の日(通常授業)
12	22(火) 12月授業終了
23(水)～1/5(火)	冬季休業
12月・1月の土日(予定)	伝統芸能実習I(武道学科2年)
12月～2月上旬(予定)	伝統芸能実習II(武道学科3年) 比較舞踊学実習(武道学科3年)
24(木)～28(月)	スキー理論・実習(社会体育学科3年)
平成28 2016	6(水) 1月授業開始
1	26(火) 後学期授業終了
27(水)～29(金)、2/5(金)、2/8(月)	後学期補講、追・再試験期間(体育・児童スポーツ教育学部)
27(水)～29(金)、2/8(月)・9(火)	定期試験(保健医療学部)
2	9(火)～19(金) スケート実習(体育学部3年)
10(水)、12(金)、15(月)～17(水)	補講(保健医療学部)
18(木)～19(金)、22(月)～24(水)	追・再試験(保健医療学部)
13(土)～23(火)	スキー実習(体育学部3年)
20(土)～23(火)	スケート理論・実習(社会体育学科3年)
25(木)～3/2(水)	ホームルーム期間
中旬～下旬	伝統文化交流実習(武道学科2年)
3	10(木) 卒業式・学位記授与式
11(金)～31(木)	春季休業

注)実習等の期間については、変更することがあります。

■平成26年度 退職者紹介

坂井 元 (さかい はじめ)

昭和43年明治学院大学社会学部卒業。社会福祉法人、行政(社会福祉、児童、高齢者分野)の要職を経て、平成17年本学着任。女子短期大学部助教授、同教授を経て、26年教授。短期大学部長、幼児教育保育科長兼専攻科長(保育専攻)を歴任。日本社会福祉学会、日本保育学会、日本社会福祉士学会、日本児童虐待防止学会ほか所属。横浜市青葉区児童虐待防止連絡協議委員、日本社会福祉士会資格制度委員会委員ほかを務める。

森田 淳悟 (もりた じゅんご)

昭和45年本学卒業後、56年本学着任。助手、講師、助教授を経て、平成12年教授。スポーツ局長、学友会会長、バレーボール部部長を歴任。オリンピック・メダリスト(第19回メキシコシティ大会・バレーボール〔銀〕、第20回ミュンヘン大会・バレーボール〔金〕)。日本体育学会ほか所属。日本バレーボール協会、日本オリンピック委員会、日本ナショナルトレーニングセンターほかで要職を務める。バレーボール国際殿堂入り。

監物 永三 (けんもつ えいぞう)

昭和45年本学卒業後、45年本学着任。副手、助手、講師、スポーツ指導者在外研究員(アメリカ)、助教授を経て、平成4年教授。副学長、体育学部長、アドミッションセンター長、体操競技部部長を歴任。オリンピック・メダリスト(第19回メキシコシティ大会・第20回ミュンヘン大会・第21回モントリオール大会にて体操競技団体総合〔金〕、第20回個人総合〔銀〕ほか)。日本体育学会ほか所属。国際体操殿堂入り。紫綬褒章受賞。

西田 豊明 (にしだ とよあき)

昭和45年本学卒業後、45年本学着任。副手、助手、講師、助教授を経て、平成4年教授。健太台合宿寮寮監、学友会副会長、ソフトテニス部部長を歴任。日本体育学会ほか所属。東京都ソフトテニス連盟、日本ソフトテニス連盟ほかで要職を務める。日本学生ソフトテニス連盟会長、日本ソフトテニス連盟全日本チーム男子監督、同強化委員、青年海外協力隊技術専門委員、文部省スポーツ功労者特別指導委員ほか歴任。

森嶋 昭伸 (もりしま あきのぶ)

昭和47年中央大学法学部卒業。都立高校教諭、指導主事、国立教育政策研究所生徒指導研究センター(総括研究官)、文部科学省初等中等教育局(視学官)などを経て、平成21年本学着任・教授。日本特別活動学会、日本生徒指導学会、日本学校図書館学会ほか所属。文部科学省緊急スクールカウンセラー等派遣事業審査委員、文部科学省初等中等教育局視学委員、東京地区教職課程研究連絡協議会運営委員ほか歴任。

〔編集後記〕今号は「輪」をテーマとして日体大の取り組みについて紹介いたしました。さまざまな団体との連携は、今後具体的な内容が決定し、双方にとってより良い環境が作られていくことになります。お互いの利点を提供しあい、不足しているところを補い合う関係は、相手との強い絆が結ばれていくことになり、可能性を広げる活動であるためとても楽しみです。

体育・スポーツの可能性を追求する日体大は、大学としての教育・研究はもちろん競技力や社会貢献についても近年さまざまなことにチャレンジしています。昨年度、日体大で開催されたオープンキャンパスは、来場者数1万人を超えました。多くの方々に関心を持ってもらえることはうれしいことですが、名実ともに実力ある大学となるためにも、よりよい「輪」の広げ方を模索していきたいと考えています。